

二〇一九年度

上宮学園中学校入学考査問題（一次一般学力型）

国語

（注意）

- (1) この問題用紙は、「開始」の放送があるまで開いてはいけません。
- (2) 問題は一から三まであります。試験時間は五十分です。
- (3) 解答用紙は別に一枚あります。
- (4) 解答用紙には、必ず受験番号・名前を記入しなさい。
- (5) 「終了」の放送で、筆記用具を置きなさい。

一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

『科学』と『学習』に力~~あ~~ギらず、私たちはお互いの買ったものを交換して読み合う。趣味が合わない時もあるけれど、少なくとも、学研の雑誌は、お互いに黙~~だま~~つて読む。

うみかの『科学』は、やはり『学習』に比べて漫画が少ない分薄くて、文章も説明文みたいに淡々としてる記事が多くった。あるいは、この勉強っぽいページも、うみかにとつては、遊びに見えてるのかもしれない。だけど、私には違う。

「お姉ちゃん。」

話しかけられて、「ん?」と『5年の科学』から顔を上げると、うみかが「お願いがあるんだけど」と話しかけてきた。

「来月から、『6年の科学』を買ってくれない?」

「え。」

うみかが「お願い。」と頭を下げた。この子にこんなふうにされたことは、これまでで一度もなかつた。うみかが開いた『6年の学習』の裏表紙の見返しに、来月の『科学』と『学習』両方の予告が出ていた。見て、あっと思う。『科学』の方に、『特集・宇宙はついにすぐそこに』の文字が見えた。

気持ちが~~a~~Aした。

クラスの中には、『科学』と『学習』両方を買っている子もいる。だけど、うちの子はそういう家じやなかつた。まだ一年生の頃~~ころ~~、お母さんから、片方だけだと釘~~くぎ~~を刺された。

「いやだよ。」と、~~い~~ハンシャ的に声が出た。

あんまりなんじやないか。うみかがどれだけ宇宙のことを好きか知らないけど、だからってそのために私から楽しみを奪う権利なんかない。だいたい、普段~~ふだん~~あんなに生意気な態度を取つてゐるくせに、こんな時だけ調子いい。

「私だって、『学習』が楽しみなんだもん。いいじゃん、五年の読んでれば。来年になれば、嫌でもあなた六年になるでしょ。」

「今年じゃなきや、ダメだと思う。お願ひ、お姉ちゃん。」

すぐに折れると思ったのに、食い下がつたのがさらに生意気に思えた。私だって、『5年の学習』を読むの我慢して、一度だつてうみかに頼んだことなんかなかったのに。^①にらみつけると、うみかが思いがけず、必死な声で続けた。

「今年の『科学』は、特別なの。」

「どうして？」

「注毛利さんが、九月に、宇宙に行くから。」

私はあっけに取られた。うみかの目は真剣だった。「お願ひ。」とまた、くり返す。

「五年のより詳しく述べる。そのことが載るかもしれない。今年じゃなきや、ダメなの。」

「……そんなに好きなの？」

毛利さんや宇宙への情熱のせいなのか、それとも私とケンカしてコウフンしてるだけなのか、わからないけど、うみかの目が赤くなつていった。こくん、と無言でうなずいて顔をふせる。開きっぱなしの来月号の予告ページに、ぽとっと涙の粒^{なみだ}が落ちた。

二人してお母さんに、『6年の科学』『6年の学習』、両方を買ってくれるよう頼みに行く。お母さんは「ふうん。」とうなずいた後で、うみかに「じゃあ、頑張らなきやね。」と告げた。

「うみか、逆上がりできるようになつた？」

うみかの全身にびりっと電気が通つたように見えた。

X

つていう顔だ。

「うみかだけできなくて居残りになつたって、この間泣いていたでしょ？ みんなに笑われたつて。」

うみかは答えなかつた。私は驚いていた。

②
この子が悔しがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない。何かの間違いなんじやないかと思つていたら、お母さんが「好き嫌いが多いからよ。」とうみかに言い、さつさと台所に戻つてしまふ。

結局、『6年の科学』のツイカがオーケーになったのかどうかはわからぬままだった。

その日の夕食、うみかがナポリタンのピーマンを、時間をかけて丸呑みする音が、横の私にまで聞こえた。顔色を悪くしながら、無理して片づけていた。

うみかはとらえどころがない。

ピアニカを忘れた、その日もそうだった。五年の教室を訪ねて貸してくれるよう頼むと、うみかが少しだけ不思議そうな表情を浮かべた。

だけどすぐに「わかった。」とうなずいて、水色のピアニカケースを持ってくれる。

ひょっとして、ピアニカのホースで間接キスになるのが嫌なのかもしれない。だけど、別にいいじゃないか、姉妹なんだから。他の学年にどれだけ仲がいい友達がいたって、さすがにピアニカは借りられないだろうけど、姉妹だったらそれができる。私は得した気分だった。

びっくりしたのは、授業の後、借りたピアニカを返しに行つた時だった。うみかの近くにいた五年生が「あれ、うみかちゃん、ピアニカあつたの？」と私たちに声をかけてきた。

「忘れたんだと思つてた。お姉ちゃんが持つてきてくれたのに、間に合わなかつたの？」

「うん。」

うなづくうみかは落ち着いていた。ピアニカの側面に書かれた平仮名のうみかの名前が、私たちの間で間抜けに浮き上がつて見えた。私は自分のミスを悟る。あの不思議そうな表情の意味はこれか。

「——同じ時間、だつたの？」

「そう。」

「言つてくれればよかつたのに。」

「だつて。」

短く答えるうみかの口調に怒っているそぶりはなかつたけど、それがよりいっそう私にはこたえた。ピアニカを忘れてみんなの間に黙つて座る妹を想像する。六年の教室からも、きっと私たちのピアニカの音が聞こえてきたはずだ。その音を聞きながら、下の階で座り続ける気持ちはどんなものだつただろう。

唇くちびるを引き結ぶと同時に、胸の奥おくがきゅっと痛んだ。素直すなおに言葉で謝あやまることができないほど、気まずかつた。

「逆上がりの練習、してる？」

尋ねていた。うみかがぱちくりと目を注ながしたたく。

私は逆上がり、得意だつた。

(3) 「一緒に練習しよう。」

罪滅ぼし、というほどの意識はそれほどなかつた。ただ、一人きりみんなのピアニカ練習を見つめる妹を想像したら、それが逆上がりの居残りをさせられる姿と重なつて、私の胸を締めつけた。

うみかをバカになんかさせない、と強く感じたのだ。

(4) 鉄棒の特訓は、近所の『ちびっこ広場』で放課後にやることにした。私が一緒にやろうと言う前から、うみかは毎日ここで練習していたらしい。

毛利さんが宇宙に行くのは九月。スペースシャトルエンデバーの名前をテレビでも少し前から紹介してゐる。

「そんなに楽しみなの？」

「楽しみ。」

別に意地悪で聞いたわけじゃなかつたけど、うみかの返答は短かつた。

鉄棒を両手で握り、えいと空に向けて蹴り上げたうみかの足が、重力に負けたようにはたん、と下に落ちる。

「足、持つてあげようか。」

私が逆上がりができたのは一年生の時だ。その時、先生やお父さんが、練習する私の足を捕まえて回してくれた。

「重いよ。」

「大丈夫だよ。」

b 安請け合いしたけど、うみかがえいっと足を蹴り上げたらかなり迫力はくりょくがあった。捕まえそこねて、さらにもう一回。思いきって手を伸ばしたらうみかの靴の先が額をかすめた。

「いたつ。」

「あ、ごめん。」

ぶつかった場所を押さえてうずくまつた私に、うみかが近寄る。「だから言ったのに。」と。

「いいよ。私、自分で回れるようになるから。」

「私はいなくてもいいってこと?」

じんじん痛む額を押さえながら見たうみかの顔が、表情をなくした。おや、と思う間もなく、うみかが首を振る。

「ううん。いて欲ほしい。」

今度は私が表情をなくす番だった。そんなふうに素直に言われたら、逆らえなかつた。

「——見てれば、いいの?」

「うん。お願ねい。」

C うなずいて、それから何度も何度も、空に向けて足を蹴る。

⑤ 「エンデバーってどういう意味か知つてる?」

何度も目の失敗の後で、うみかが息を切らして言つた。手のひらが赤茶色になつて、見ているだけで鉄の匂においがかけそつだ。私は「知らない。」と首を振つた。

「努力。」うみかが答えた。

そらにうつすらと藍色が降りてきて、薄い色の月が見え始めてしばらくした頃、うみかがどうとう練習をやめた。妹が鉄棒を離れたのと入れ違いに、今度は私が逆上がりをする。

足を上げるとき、つま先の向こうに白い月が見えた。今日、うみかは何度も何度もこうやって、私と同じように、月を蹴ってたんだなあと思った。

逆上がりを成功させて、D 地面に降りた私に向け、うみかが「いいなあ。」とつぶやいた。

「思いつきり走ってきて、その弾はずみの力を借りるって手もあるよ。」

自分が最初の頃、そうやって初めて回れたことを思い出す。こんなふうに、とお手本で回って見せた。二、三メートル離れた場所から走り、その勢いで鉄棒をつかむ。月を蹴り、ぐるんと回る。

「こう？」

うみかが真似して、同じように走る。ぎこちない走り方だったけど、そのまま鉄棒をつかんだら、これまでで一番勢いよく足が上がった。あと少しできれいな円が描けそうだった。

「惜しいっ！」

思わず声が出た。⑥ うみか自身、驚いた顔をしていた。

「まだ、練習してもいい？」

「このやり方で、明日からもやってみなよ。今日はもう遅いよ。」

家に帰ると、もう七時を回っていて、私たちは、おじいちゃんとお母さんに叱られた。お父さんがまだ帰ってきてなくて、よかつた。

「明日も練習、一緒に来てくれる？」

うみかとひさしぶりにお風呂に一緒に入った。鉄棒をつかみすぎたせいで感覚がおかしいのか、うみかが何度も手をグーとパーに動かして

いる。

⑦ 「いいよ。」と私は答えた。

誰かが何かできるようになる瞬間に立ち会うのが、こんなに楽しいとは思わなかつた。

(辻村 深月『家族シアター』による)

注 毛利さん……日本人で二人目の宇宙飛行士。一九九二年にスペースシャトルのエンデバー号に乗りこんで宇宙へ行つた。

しばたたく……何度もまばたきをする。

問1 線部あ～えのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問2 **A** [] **D** []に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------|---|-------|
| ア | にやりと | イ | きょとんと |
| エ | すとつと | オ | こくりと |
| | | カ | ざわつと |

問3 線部**a**「釘を刺された」・**b**「安請け合い」の文中での意味としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- a** 「釘を刺された」
- | | |
|---|----------|
| イ | 意地悪をされた |
| ウ | きつくしかられた |
| エ | お願いされた |
- b** 「安請け合い」
- | | |
|---|--------------|
| イ | すっかり安心すること |
| ウ | 不安な気持ちをかくすこと |
| エ | 積極的に手伝うこと |
| エ | 軽々しく引き受けること |

問4 線部①「にらみつけると」とあります。その理由としてふさわしいものを、次の文から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア これまで見たことのないうみかの行動を見て、何か悪いことをたくさんしているのだろうと直感したから。

イ 「私」が『科学』を読みたくないのを知っていて、わざと買うように頼んできたことに腹が立ったから。

ウ うみかがどれだけ本気で『6年の科学』を買うように頼もうとしているのか、試してやろうと思つたから。

エ 「私」から『学習』を読む楽しみを奪おうとするうえに、簡単にあきらめないのが生意気だと感じたから。

問5

X

に入る言葉を、次の文から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア ふざけるんじゃないわよ イ 痛いところ突かれた

ウ 何を言っているんだろう エ どうやってごまかそう

問6 線部②「この子が悔しがるとか、人の目を気にするところなんて想像できない」とありますが、「私」はうみかのことをどのように思っていますか。文中から九字でぬき出して答えなさい。(句読点なども一字に數えます。)

問7 線部③「一緒に練習しよう」とありますが、この時の「私」の気持ちを説明した次の文の1・2に入る言葉を答

えなさい。ただし、1は九字、2は十字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に數えます。)

「私」にピアニカを貸したせいでみんなの間に黙つて座ることになつたうみかの姿を想像すると、逆上がりができなくて
1 うみかの姿と重なつてたまらない気持ちになり、そんな妹を2、と強く思った。

問8 線部④「らしい」と同じ働きのものを、次の文から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 彼のふるまいはいかにも専門家らしい。

イ よちよち歩きの赤ちゃんはかわいらしい。

ウ 人知れず努力を続けるのはすばらしい。

エ 駅前に新しいスーパーができるらしい。

問9 — 線部⑤「エンデバーってどういう意味か知ってる?」とあります。うみかはなぜこのように聞いたのですか。その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 問題の答えとしてエンデバーという言葉の意味を口にすることで、自分ももう少しがんばろうと思つたから。

イ エンデバーという言葉の意味を知れば、姉もきっと自分のように宇宙にきょうみを持つはずだと考えたから。

ウ 姉はエンデバーの意味を知らないはずなので、ここで知識を見せつけられれば自分が優位に立てると思ったから。

エ 最近知ったエンデバーという言葉の意味がすてきなので、姉にもぜひ知っておいてほしいと考えたから。

問10 — 線部⑥「うみか自身、驚いた顔をしていた」とあります。うみかはどのように驚いたのですか。その内容としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア お姉ちゃんが自分をはげまそうとして、大きな声で「惜しいっ!」と言つてくれたこと。

イ お姉ちゃんの教えてくれた逆上がりの方法を、自分が素直に真似してみようと思えたこと。

ウ お姉ちゃんの真似をして逆上がりをしてみたら、思つていたよりもずっとうまくいったこと。

エ お姉ちゃんと一緒に、いやだつた逆上がりの練習を夜おそくまで夢中になつてしていたこと。

問11 — 線部⑦『いいよ。』と私は答えたとあります。はじめのころと比べて私のうみかへの気持ちなどのように変わりましたか。「逆上がり」「応えん」という言葉を必ず使って、解答らんに合うように四十五字以内で答えなさい。(句読点なども一字に數えます。)

一一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

みなさんは、いつ森に入りましたか。森を歩きましたか。

日本は、国土のおよそ三分の二が森林なのにもかかわらず、「森を歩く」という文化があまり育つてないといえない状況です。

ドイツやオーストラリアなどに行くと、家族でのピクニックなども含めて大勢の人たちがごく自然に森の中を歩いているのを目にはしますが、日本では以前はそのような人をほとんど見かけませんでした。**A**、近ごろは、ウォーキングやランニングを行っている人をだいぶ見かけるようになりました。時を経てようやく日本でも、（森林の力アチを見直す前兆になるのかどうかわかりませんが）中高年の人たちや注山ガールと呼ばれる若い女性などが山に入ってくるようになりました。山のもつてている多くの魅力が人々に伝わりはじめたのだと思います。

逆に、私たちのように山で暮らす人間は、みんなが入ってこられるような道路の整備を積極的に行うことが必要な時代になってきたと思います。私の場合、注間伐した木材の運び出しと手入れ作業のために、二・五・三メートル幅の作業道を造っていますが、林業作業以外にもさまざまな目的に使えるように心がけています。「ア」

森に入つてみると、森林の状態がどうなつてているかに気づくはずです。そして、森のために何ができるのか、一人ひとりがぜひ考えて、行動を起こしてほしいと願っています。

B 暮らしの中で、家屋や家具の材料などに国産の「木を使う」ことを通じて、日本の森林や林業を応援しようという方法もあると思います。

② 私の理想の森林は、鹿児島県屋久島の、有名なウイルソン株周辺の「小杉」と呼ばれる、二〇〇～三〇〇年生のスギと広葉樹の注融合した森林の姿です。このような森は世界中でもそんなに多くはありません。放つておくと注林床から広葉樹が育つてくるような環境で、スギやヒノキの人工林を育てている私にとって、そのような森林づくりは林業の注醍醐味であり、夢でもあります。「イ」

林業は、自然に一番負荷をかけて行う職業の一つです。「自然に負荷をかける」とは、つまり、自然にしておけばそのまま伸びたいように伸びていく木の枝を整えたり、雑草を刈り取ったり、**C**、もっと成長を続けようとする樹木そのものを注伐採するなど、いわば自然

に逆らつた行為を行つてゐるということです。ですから、負荷をいかに少なくするかということを考えると、理想的なのは高樹齢の木を増やすことであり、さまざまタイプの木が生いしげる森（混交林といいます）をつくるということになります。

自然災害などの危険性はともないます。【遠くからながめると針葉樹の山に見えるが、中に入れば広葉樹の高木や低木があり草が生えていて、苔むした石の間をちよろちよろと沢の水が流れている】といったぐあいの森です。

（中略）

山仕事を行つてゐると、人間の生き方に関してもいろいろと自然から教えられることがあります。【ウ】

たとえば、広葉樹を伐採すると、萌芽^(ほうが)といって、切り株から多くの芽が出てきますが、そのままにしておくと、おたがいがキヨウソウし合って枯れたり、木が密集^(か)して細くなってしまつたりします。そこで私たちは、それらの中から将来大きく成長していきそうな力強い芽を選んで、それ以外を取つてしまふ「芽かき」という作業を行います。残した芽に養分を集中させることによつて、早くりっぱな木に成長できるようになります。

このとき、最初から一本にしてしまう場合と、二、三本残しておいて数年後にあらためてそれを残すかをハンダンする場合があります。

【D】　それが一番良いかがわからないときには、じっくり時間をかけて考えるわけです。【Y】

かく残した一本が動物たちに食べられたり、雪の重みで折れてしまつたりと、思いもよらないことが起ころる可能性もあります。ですから、どうが良いのかはつきりとわからぬ場合は、結論を急がずに、時間をかけて見極めることが必要な場合もあるということです。

人間も木と同じで、いろいろな芽を持つています。私のように小さいころから林業で生きていくんだと決めて、それだけに向けてやつていく者や、子どものころの夢はあれもこれもあつたけれど最終的に一つにしほつて職業を選ぶという人もいると思います。【E】

いずれにしても、一度就職したら一年や二年であきらめることによつて、社会に貢献できるよう大きくなりっぱな成長していくものです。そして、そのためには、土壤^(じょうじょう)（就職先）に根を張るための養分（知恵や体力）を、小さいころから作つておくことが大切になると思います。そしてその間に、二酸化炭素を吸収してきれいな空気をつくつたり、水をたくわえてきれいにしたり、土をしつ

かりおきえて土砂くずれをフセイだりしながら、社会に貢献します。

(田中惣二『本当はすごい森の話』による。)

注

山ガール……登山用のスカートや色の美しい小物など、女性らしい服装を取り入れながら登山やハイキングを楽しむ女性。

間伐……木の生育を助けたり、光を取り入れたりするために、適度に木を切つて数を減らすこと。

融合……とけあって一つになること。

林床……木のかげになつて光が届きにくく、それに適応した植物が生える場所。

醍醐味……深い味わいや本当の楽しみ。

伐採……山林の樹木を切り出すこと。

問1 線部①『森を歩く』という文化があまり育つてない」とあります、これまで「森を歩く」という文化が育つ

てこなかった理由を説明した次の文の1. に入る言葉を答えなさい。ただし、1. は五字、2. は

二字で文中からぬき出して、それぞれ答えなさい。(句読点なども一字に數えます。)

気軽に森に入るための1. が十分だったとはいはず、2. もあまり知られていなかつたから。

問2

A
S
D

に入る言葉を、次の中から一つずつ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- ア たとえば イ しかし ウ むしろ
エ だから オ さらには カ つまり

問3 線部あくえのカタカナを、それぞれ漢字に直して答えなさい。

問4 次の一文は、文中の「ア」～「エ」のどこに入りますか。一つ選んで、記号で答えなさい。

迷ったときは、時間をかけて考えてもいいと思います。

問5 ─ 線部②「理想の森林」とありますから、自然にとつて理想的なのはどのような森林をつくることですか。文中の語句を使って、解答

らんに合うように三十字以内で答えなさい。（句読点なども一字に数えます。）

問6 ─ 線部③「密集」と同じ成り立ちになつてゐる熟語を、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 速達 イ 危険 ウ 問答 エ 配給

問7 Yに入る言葉としてふさわしいものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 時間が経てば、「芽かき」前の状態にもどせる

イ いくら悩んでも、結論を出すことはできない

ウ いたん切てしまえば、取り返しがつかない

エ その間にいろいろな経験をすることができる

問8 本文の内容を説明した文としてふさわしいものを、次のなかから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 山で暮らす人々は、「森を歩く」という文化を世の中に広めるために日夜苦労を重ねている。

イ 林業は自然に負荷をかけるため、できるだけ自然のままで木を育てるようにするのがよい。

ウ 将来の目標はできるだけ早く決め、それに向けてひたすら努力を重ねることが大切である。

エ 人生においていろいろな可能性を想定して、じっくり時間をかけて考えることが必要である。

次の1～10の（　　）に入る言葉をひらがなで入れて、下の意味に合うように慣用句やことわざを完成させなさい。

- 1 あげ（　　）をとる……相手の失敗につけてこむこと。
- 2 （　　）が回らない……借金が多くてやりくりができないこと。
- 3 （　　）を割つたような……性格がさっぱりしていて、小さいことにこだわらないこと。
- 4 とりつく（　　）もない……たよりにできるものが何もないこと。
- 5 火に（　　）を注ぐ……事態を余計に悪くすること。
- 6 （　　）をたたいてわたる……用心に用心を重ねること。
- 7 （　　）をつく……すっかりなくなってしまうこと。
- 8 目から（　　）が落ちる……あるきっかけで、急に物事がよく理解できるようになること。てつていてき
- 9 根ほり（　　）ほり……細かいところまで徹底的に行うこと。
- 10 うりのつるに（　　）はならぬ……子供は親に似るものだということ。